

Abstract

中東における安全保障観の変質——脱国家主体と国家主体との相互作用から論じる

酒井 啓子（千葉大学グローバル関係融合研究センター長）

本稿は、中東における非国家／脱国家主体と国家主体との間に相互作用関係を見、非国家／脱国家主体の台頭が過去に中東地域で形成されてきた国家主体中心の地域安全保障体制から生まれたものと論じる。そこで着目するのは、主権国家による国家安全保障を軸とした地域安全保障概念と、非国家／脱国家が掲げる共同体の安全保障概念との関係である。アラブ、イスラームに基づく共同体としての安全保障観は、国家主体により放棄されて長い間、欧米諸勢力による軍事介入のたびに共同体の危機意識が底流で喚起されるため、国家安全保障においても動員や意識喚起のために共同体の安全保障のレトリックが多用されてきた。イラク戦争以降は、共同体の安全保障観は専ら脱国家主体が担った。一方で、脱国家主体の掲げる「悪魔化」論理は国家主体にとって利用可能なものとなり、政権が政敵を追い落とすための「安全保障化」に、脱国家主体の存在が不可欠な存在と化している。

『国際安全保障』第45号第2巻（2017年9月）35－54 ページ。